

## アドルフ A. バーリの生涯 (2)

正 木 久 司

はじめに

- I 若き日のバーリ
- II 政治の世界のバーリ (以上前号)
- III 戦後のバーリ (以下本号)

### III 戦後のバーリ

リオをさよならすることによって、バーリの最も長かった政府のための仕事は終わりを全うした。ルーズヴェルトがバーリに与えた経済関係の仕事は、トルーマン治政下では表面に現われなかった。そして、ルーズヴェルトによって用いられてきた多くの人たちのエネルギーは、もはや大統領執務室では大奇術師(ルーズヴェルトのこと)がいなくなったという事実によりあきらめて発揮されなくなった。幾つかの生き方があったが、バーリにとって幸いだったことは、彼を待ち受けるひとつの世界をもっていったことである。彼は教職と法律の実務の世界に戻った。彼は株式会社制度に関する終わりのない仕事に再び着手した。彼はワシントンでの生活を決して好ましく思っていない、特に首都でのカクテル・パーティーによる巡回は、彼にとって不快なものであった。ニューヨークの19番街の彼の家ほど、彼にとってこの世で居心地のよいところはなかった。彼はグレート・バーリントンに農場をもっており、そこでは自分の手で土地を耕やし、季節ごとに収穫があった。しかし、ニューヨークの家は、このセカンド・ハウスに負けず劣らず居心地はよかったのである。

たとえ時には不満があったとしても、8年間も政府のために高いレベルで常勤の仕

事をしてきたので、その終焉はその人を少なくともしばらくの間は分別を失わせた。バーリもしばしばその寂しさを経験した。そのことはたとえば、当面の出来事に関する日常の彼のコメントに現われていた。そのコメントは、もっぱら公の情報源から得たものであったが、発行されない新聞の鋭い論説のような内容のものであった。特に批判的な言辭は、國務省でのかつての仲間であるデーン・アチソンに向けられた。2人は共に4年間次官補として働いてきたが、お互いに反目し合いながらも結びついてやってきた。やがてバーリは國務省を去り、アチソンは一連の迂余曲折を経て、1949年1月から1953年1月まで國務長官になった。

事実上、責任が同じ領域である2人の仕事は、ルーズヴェルトの治政のあり方からして、多くのあつれきの源泉となった。普通の言い方をすると、2人は第一級の法律上の考え方を有しており、特にルイス・ブランダイスの影響下で練磨されてきた。偶然にも、2人は聖職者の息子であったが、彼らの父親は異なった教派であり、異なった位階であった。ただそれだけに、2人は個人的な判断において多分に伝統的なプロテスタントの考え方に基づく傾向があった。バーリの考え方は、若干の基本的な原則によって支配されていた。すなわち、半球単位の構想にもあったように、半分は科学的研究により、あとの半分は神の預言によっており、そして経済学の活用によって一國の株式会社構造を、また政治的民主主義の人類平等主義の原理を綿密に検討する必要があるというものであった。これに対して、アチソンの考え方は、国内ないし国際的に法律の広大な領域について自由に論じることであり、決して預言的な神の思し召しで邪魔されることはなかった。彼はまた辛辣な弁舌をふるってよく仕事をしたが、時にはやり過ぎるくらいがあった。その弁舌は、彼が多少とも敬意をこめて服従を強要するので、嫌がっている相手を変傷つけた。

バーリは一途な頑固さでもって、彼の生涯を通じて多くの神のお告げを追求してきた。つまり、彼は急進的な社会的・制度的改革のための靈感の創始者であり、世界平和の柱としての地方分権主義と大陸主義（政治的・経済的開発と防衛を、1つの大陸内に集中しようとする孤立主義的な態度、または政策）の頑固な信奉者であった。しかし、カルヴァン主義者のイデオロギー上の遠慮が、バーリに対して彼の信条面で完全な体系的表現を与えることがなかったのである。アチソンはアメリカの外交政策を扱う優れた職人であった。その場合、将来の見通しと脅威のすべてを想定して、現在と将来の緊急事態に応じた外交政策の処理をしたのであった。バーリとアチソンの

非両立性は、彼ら間の衝突の要因を生みだした。この2人はアメリカにとって優れたサービスを提供する人物であるが、彼らが生きていた間お互いに嫌ったままでいたことは残念なことである。しかし、もし彼らの国務省内の衝突が、彼らがつけてきた歴史の脚注として容易になくならなかったならば、それははるかに遺憾なことであつたであらう。

パーリはひとりの友人に献身的に尽したのであるが、それは憤慨させられたとき、パーリが敵意に対して敵意で報いるほどの献身ぶりであつた。彼のラ・ガーディアに対する友情は、おそらく2人のまったく性格の異なった人間と一緒に結び付ける最高の証拠として相互に忠節があつたことで明らかとならう。つまり、ひとりかもうひとりを完全に信頼し、長期間にわたり、2人の性格上の相違がむしろ交友の結合剤となることである。パーリは聡明な一知識人として、ラ・ガーディアに対して自分の考え方を提示して評価を得る必要があつた。誰もがとやかく言えないやりとりから最も多くのものを得るのは誰であらうか。それはやはり心から信じ合っている者であらう。確かなことは、それが2人にとって名誉となることである。

ラ・ガーディアは晩年において、多くの人びとから風変わりな過去のなごりをとどめた人と見られていたから、パーリは彼を国際航空会議のアメリカ代表のひとりに指名した。ラ・ガーディア特使はまた、ブラジルのデュトラ大統領の就任式に合衆国の代表として派遣された。パーリがニューヨークで再び落ち着いたとき、専門的で学問的な仕事は彼にとって十分にできなかった。彼が政治の仕事をやめたときもっていたものを必要とした。つまり、老練な政治家と協力して政治に積極的に参加することであつた。ラ・ガーディアは依然として政治の場にいた。しかし、彼の時代は終わっており、その死で幕は閉じられた。1947年9月20日にそのときがやってきたが、それはパーリにとって残酷な一撃であつた。彼の教義のひとつは、ジェームス・パーキンス宛の手紙で見事に表現されているように、アイデアの追究と諸行為の実践との間の均衡を保つというカルヴァン主義の責務であつた。

パーリに対して、民主党から独立して政治的役割を演じる機会を提供するような独自の仲間によるパーティーがニューヨークで開かれた。もちろん、そのことは民主党から完全に離れることを意味しなかつた。一連の内部抗争があつた後の自由党は、共産党支配のアメリカ労働党から離れることによって、共産主義者の影響力から自由となった。その自由党が、アドルフ・パーリを1947年にその委員長に選出した。この新

たに就任させられた委員長は、すべてのものがどうも馬鹿らしく思えた。1年半後に、バリーはこの自由党のために適当な言葉を見つけた。すなわち、それは民主党に対する圧力集団というものであった。その態度は、1955年7月にバリーが委員長を辞職して、専門的な自由党の指導者に代わるまで続いた。この圧力集団は、民主党からの独立のための一定の尺度を堅持し、したがって民主党の後援を避けて運営された。バリーはラ・ガーディアとよく似た要素をもつD. ドッビンスキー (David Dubinsky) を登用した。しかし、バリーにとってもうひとりのラ・ガーディアにならなかったことは言うまでもない。

小さな規模による自由党での経験は、バリーを純真にさせ、社会的責任を引き受けるのに熱心となった。これまで、彼は公的に責任を負わされたとき常に不安を抱いており、その達成が見通されるまでがまん連続であった。沈思黙考があるときは静かに、あるときは長引いて、苦悩を伴いながら続くのであった。このような状況はかつての國務省でのバリーによく見られた。つまり、ルーズヴェルトがバリーを引っ張り出したときから、バリーが自分の将来を考えて國務省を去るときまでの思考様式であった。自由党は、バリーのリーダーシップがやっと名目的になったときに、彼を不快な状況に追いやった。バリーは、ジョン・F. ケネディーの側近と口論した後に、ラテン・アメリカの特別調査団 (Task Force) の委員長職を引き受けたとき、彼より有利な立場にあるものを知った。この仕事は、バリーに報酬よりもさらに大きい不快感を与えるものであった。しかし、いろいろなエピソードにより、それが彼にどのような不快なものを課したにしても、バリーはこの仕事の試練から逃れることを欲しなかったであろう。確かに、バリーは自分が熱望する高い政策決定の地位に到達しなかった。しかしながら、バリーは決して公的な威信と自信を失なわなかったのである。

特にひとつの領域における奉仕的な探求は、決して止むものではなかった。たとえば、ラテン・アメリカ、この世界の地域はバリーにとって最も関心のあるところであった。在職6カ月後の1961年7月に、彼は國務省を去るが、そのとき彼は失意の人であった。その仕事を引き受けるにあたって、彼は自分自身の判断に必ずしも十分に従ったわけではなかった。というのも、その判断は権限よりも責任の方が重い政府の地位をそう簡単に引き受けてはならない、というものであった。しかし、もしリンドン・ジョンソンがバリーにワシントンに戻ってラテン・アメリカに関する仕事をするかとたずねたならば、彼はそうしたのであろう。半球統一のためのバリーの固執とその努

力の持続性は、決して弱まらなかった。彼が政府内部での外交の仕事がもはやできなくなったとき、彼は多くのラテン・アメリカの友人と結束して、私的な外交としてそれを続けてきた。これら友人たちの誰かが右派ないし左派からの攻撃の目標になったときはいつでも、バーリの答えは、「彼はニューディール政策の支持者である」というものであった。

リオ・グランデ川の南の国々へのバーリの関心は若い頃から始まっており、ルーズヴェルト治政下の一連のアメリカ大陸会議において、バーリの影響力はかなり強いものがあった。それは、1936年のブエノス・アイレスと1938年のリマの会議に始まる。そこでは、バーリはアルフレッド・ランドン (Alfred Landon) の賞賛を得た。それから、彼は1947年には政府内にいなかったため、そのときのリオ会議では全般的な掛かり合いをもたなかった。しかし、そのときに彼の主要な目的は結局はかなえられた。つまり、それぞれのアメリカ共和国が非アメリカ勢力からの攻撃に対して相互に領土の保全を保証することである。また、モンロー主義の実施が、アメリカ大陸のそれぞれの国、ないしはすべての国の責任となってきたことである。バーリは、アメリカ統一の基本法が結局は存在していると感じた。1961年12月に、アメリカのキューバに関する大しくじりについて日記に書いた後で、バーリは次のように記している。すなわち、「もし私が将来にわたって学究的な経済学や政治学に固執していくならば、おそらく私は自分が考える以上にはるかに賢明であったであろう。しかしながら、そこにはひとつの困難がある。もしアメリカ体制の根本的な完全さが保たれなければ、この世で最上の学究的な仕事のすべてが重要でなくなる」と。

1962年2月に、バーリは妻のベアトリスと中央アメリカ (メキシコの南の国境からコロンビアの北の国境までの地域) の小旅行に出かけた。彼は後になって、「長い生涯のひとつ、カリブ人に招かれてそこへ行ったことがよかったと思う」と書いている。カリブ海 (西インド諸島) の11の国々には、多くの国々の中でニューディールにとって必要なものであった。あちこちで、若干のたくましいニューディーラー (ニューディール政策の支持者) たちは、暗黒街の人たちから内部的ないし外部的な攻撃を受けつつあった。バーリの仲間であつて傑出していた人は、コスタリカの行政機関の長 (junta president) であったジョセ・フィンゲーズ (Jose Figueres) であり、この国の大統領に2度選ばれている。そして、20年以上にわたって引き続き民主主義のための一大勢力となっている。もうひとりの貴重な友人はルイス・ムノーズ・マリン

(Luis Munoz Marin) であり、彼は外国からの侵略に対して自らを防衛する必要がなかった(少くともカストロが共産主義者であることを表明してはじめて)。というのは、彼の島と合衆国とは特別の連携があったからである。友人のリストはいちだんと増えた。そこには良い連中、または悪い連中が含まれており、パーリは絶えず彼らの間の交戦状態をなくするように努めてきた。

パーリの私的外交は徳義に適ったものであり、政治的には多少とも左派であった。私的外交は、そのゲームが開放的に演じられることはなかった。しかし、それはより良い方向への何らかの注目すべき変化に貢献したのである。それは、ロムロ・ベタンコート (Rómulo Betancourt) の亡命から復帰に際し、また彼のベネズエラの大統領選に役立ったことである。ベネズエラでは、パーリは1959年から1964年の大統領の全任期中に大いに支援した。そして半世紀の間、独裁政権下にあったこの国の民主主義の定着への基礎を築いた。それが、ニューヨークの東19番街142の私的な司令部をもった外交の主要な業績であったのである。

以上のことから、誰しもがアドルフ・パーリがラテン・アメリカに涵まされてきたと結論づけることができる。このことは確かに、パーリ以外の他の人にとっても言い得ることであった。ところが、肝心のパーリは同時に他の別のものに取りつかれて結構啓発されており、そして新たな構想を生みだすように専念しているようであった。彼は講義に没頭し、当初に称賛されたテーマ「近代株式会社」をいちだんと深めるような本を書き続けた。4年毎の大統領選挙では、パーリは何カ月間も前から民主党候補者のために熱狂的に働いた。そのさい、「自分の推薦する候補者が確実に勝つ、ということで、純粋の政治家としての明白な特性を前面に出すことで働いたのである。他の熱心な人たちは、ひとつの籠の中に自分たちのすべての卵を入れようと苦労しているのに気がついた。しかし、パーリの卵のすべてを十分に満たす籠はなかった。

1957年3月の日記の中で、パーリは彼の才能を必要としてきた4つの大財団を記している。それらは、ザ・ファンド・フォア・ザ・リパブリック、ロックフェラー・ブラザース・ファンド、ロックフェラー財団、そしてヒューマン・エコロジー委員会である。彼はそのすべてにイエスと言ってきたが、彼の気持に最もしっくりいっていた財団は二十世紀財団であった。それは、彼と古いつながりをもつものであった。彼は一個人としては孤立を嫌がり、多くの人たちと一緒によく仕事をして、決してそこか

ら逃げ出すようなことはしなかった。したがって、種々の利害関係を有するなかで、それぞれについて異常な熱心さでもって仕事をしてきた。全体的に見て、このことはヒューマンストの間で非凡な個性ある地位を彼に与えたようであった。そして実際に、バーリの最高の傑作ながら余り読まれていない本である『政治勢力の自然淘汰』(*The Natural Selection of Political Forces*, 1950)は、彼の人間的側面をよく示している。しかし、自分の行動とできるだけ同一歩調にしたいとする彼の熱意は、ともすればヒューマンストとしての平静さ、物事にとらわれない見方を遠ざけるようであった。結局、バーリは控え目な急進論者ということになる。

善隣政策は、アメリカ大陸があたかもひとつの国のように行動せねばならないことを必ずしも意味していない。その信念は、バーリが共産主義者による帝国主義の半球への侵略によって、それが破壊されると考えるだけの十分に長い生活体験から生まれたものである。それがたとえ明らかに急進的な考え方であったとしても、バーリの経済力に対する政治力の概念なのであった。幾度も、そしてかってフランクリン・ルーズヴェルトの最初の選挙のために書かれた文書からも明らかなごとく、闘争の境界線を思いきり拡げ、その究極的な結論を引き出していたといつてよい。一国の政治力は、いわゆる民間の富裕階層のもつ一般的な権力を引き継ぐことを余儀なくされる。バーリは彼の著作の中で、しばしば、ルーズヴェルト政権が参与したけれども銀行が閉鎖されたとき、多くのニュー・ディーラーにとって銀行の政府支配を続けようとする考えが起こっていたことを記している。概して、経済の大きな領域の国有化は、バーリによれば、確かにやってくるはずのものということができた。しかし、バーリは必然の運命の唱道者でありながら、その効用を余り認めなかった。

バーリは、ひとりのニュー・ディーラーとして、進歩が全体としてのコミュニティのために結果として生じるという仮定でもって、政府、企業、そして労働者によって結合された計画化をむしろ好んだ。しかし、このことが常に正常な方法で発生し、あるいは自動安定装置が強力に作動でき、そして最も不安定な状況の圧力に十分に耐えるほど順応的であるかについて、バーリは必ずしも確信がもてなかった。経済学者は、古典理論に対して限られた点できわめて実際の多様さを認めるにしても、失業率が低いことや適度にぎくしゃくした傾向に満足してきた。

バーリの人間に対する関心は、彼をおしなべて偏見をもたないものにした。バーリは、経済的要因が人間に影響を与え、そして人びとの反作用によって影響されるとき

に、その要因を熟視するひとつの方法を開拓した。彼の人類平等主義は、彼をアメリカの多様な急進派、つまり人民党の主義 (populism) と呼ばれるものに駆り立てた。時どき、アメリカの人民党の政策は混沌に近いところ——パーリの言葉では極限の狼狽といわれるところ——まで行ったことがあった。ただ、彼の考えは余りにも洗練されていて、人民党の主義に本来的にある危険を見いだせないほどであった。また同時に、彼独自の人民主義においても同様のことがいえた。彼の急進主義に關しての主たる抑制力は、彼が常にジェファーソン崇拜者であった事実によ來していた。ジェファーソンの主義を信奉する社会 (特に中央集権を極力押え、個人の基本的人權、農業経済と農村社会の優位性を強調することを特徴とする社会) は、市民が欲することを自由にさせるか逆にできないかを考慮することによって、ハミルトン主義の強力な中央集権国家 (特に強力な中央集権・保護関税の重要性を強調する国家) をともかくもたらすことはなかつたのであつた。

パーリは株式会社権力と政治力の当面の研究を決してやめなかつた。それも権力の発展の方向について、またこの私的権力と公的権力のそれぞれについて見ると同時に、他の権力との関連において見てみることであつた。彼はおそらく、その研究を中断することを欲しなかつた。彼は何らかの新しいものを創造しようと欲し、常に注意深い態度をとってきた。そして終生、一方で試案をいつも用意しながら、他方でおそらく決して明確に選択の対象となる案とはしなかつた。彼の信奉者は数え切れないほどおり、そして気ままな存在であつた。パーリの理論の多くの写しの中で、誰かが経済学を面白くなくはないが、取るに足らない科学であると主張して喝采を得ようとするときでさえ、彼はその人に対して寛容な態度をとつた。しかし、これらのすべてはささいな事柄である。パーリ理論の写しやへたなまね事は、本物のパーリに正しい見識を提示することによつてのみ役立つことができる。パーリは、独自の専門領域で、また多面的な経験と知識でもつて、現代における善のために主要な影響力をもつ人のうちのひとりであるといえよう。

#### 〔追記〕

A. A. パーリ Jr. は、父の A. A. パーリ (1866—1960) が死んだ日 (1960年11月18日) の翌日の日記に、父のことについて記憶をたどつて、次のような短い一文を載せている。当時、パーリは65歳であつた。この文は、パーリの父のことを知るうえ



で参考になろう。

バーリ Jr. の父は1960年に95歳であり、その年に死んだ。彼はちょうど独立戦争が終わった年に生まれた(1866年)。まさにリンカーンが暗殺される直前であった。彼の父(バーリ Jr. の祖父)はドイツからの移民でありセントルイスに住んでおり、北軍に参加して1866年に帰化してアメリカ市民権を得、後に除隊している。この祖父は2年後に死んだ。祖父はカソリック教徒であり、バーリの父もカソリック教徒の洗礼を受けた。祖父はセントルイスで古い大聖堂の装飾作業に従事していたが、バーリの父は間もなくドイツのカソリック教と親しい関係にあったプロテスタント教会(Protestant Church)に入会した。ドイツから移民した多くのカソリック教徒は、ともかくプロテスタントであった。父の家族は分割されていた。彼らのバーリバーグ(Berleburg)の小さな城は、小公国であった。宗教改革の戦争で家族はばらばらになり、その地域ではプロテスタントが勝利し、今やそれがルーテル派教徒であった。家族の一部のカソリック教徒は南に下り、このことが祖父が帰化したときに、おそらくバーデンの大公国の君主(the Grand Duke of Baden, バーデンはドイツ南西部の州)の臣下であった理由なのであろう。バーリの父の生涯において、ドイツが現われ(1871年)、ドイツ帝国が没落し(1918年)、そしてナチ政権が生まれ(1933年)、崩壊した(1945年)ことが記されているのは興味深い。彼自身はオバーリン(Oberlin)に行き、そこで神学士の学位を取った(1887年)。そして、バーリの母と会い、オバーリン教会堂でオバーリン大学の学長のフェアチャイルドの司会で結婚式をあげた。彼女は、オバーリン大学で地質学に神学を結び付けようとした G. フレデリック・ライト教授の娘であった。

だがその前に、彼はハーバードに行っており、1891年に文学士(A. B.)の学位を得た。そこで会衆派教会主義者(イングランドに始まったプロテスタント一派の思想)の牧師として聖職を授けられた。彼のボストン時代(1891年—1903年)、その後のセーラムとショームント、マサチューセッツ時代(1904年—1910年)が最も実りある時期であったと思われる。というのも、マサチューセッツ州選出の上院議員のウィンスロープ・ムレイ・グラン(ダルトンの製紙工場の所有者)、ルイス D. ブランダイス(法律家)、その他ニューヨークの多くの有名人と多面的な交際がもてたからである。彼はここでは、マサチューセッツ州で最初の社会立法のプログラムを成立させ、教育

改革の初めての試みを手がけた自由主義運動の一翼を担った。彼は、ボストンのショームット教会を離れた後は、もっぱらニューヨークで余生を送った。

世の中の進展にはなかなか魅力的なものがある。移民の息子であった彼がハーバードを卒業したとき、実に彼は大きな躍進を画したのであった。つまり、ハーバードは彼に一種の魂の祖国を残したのであった。彼の死の6カ月前の95歳のときに、彼はハーバードの学位授与式に出席したいと頑固に主張したが、それはほとんど彼を死に追いやるものであることを意味しており、それほどハーバードに忠節を尽してきたのであった。この熱情的なエネルギーは、時には各界の多くの人びとと不必要な衝突を惹起したが、それはまた多くの偉大な人びとと接触させてきた。その人びとは、彼に新たな血液を注入して強さを引き出し、その強さを絶えず更新させる人たちであった。それはまた、予想外の結果として彼を支配階級に送りこませた。つまり、この支配階級は1890年から1914年にかけて勢力のあった金権階層を通じて形成された活動的な知識人の階級であった。そして彼らは、合衆国の文明的な社会制度の始まりへの道を切り開いたのである。

アドルフ・オーガスト・バーリとメアリ・オーガスト・ライト・バーリは4人の子供をもった。リナ・ライト、アドルフ・オーガスト、Jr. (1895年1月29日生まれ)、ミリアム・ブロッソム、そしてルドルフ・プロタスである。アドルフ・バーリ、Jr. は1913年にハーバードを卒業し、翌年に修士号をとった。1916年にハーバード・ロー・スクールを終わり、ボストンのブランドイス法律事務所<sup>1</sup>に勤めた。合衆国が戦争に参画した1917年に、バーリは志願して陸軍に入隊したのであった。

なお最後に、Adolf Augustus Berle の作品をあげておこう。

*Modern Interpretation of the Gospel Life*, 1899  
*The Outlines of A Preachable Theology*, 1903  
*The Colorado Mine War*, 1914 (pamphlet)  
*Christianity and the Social Range*, 1914  
*The World Significance of Jewish State*, 1918

1 *Navigating the Rapids 1918—1971*, pp. 3-4,